

イングランドにおけるガーデニングの歴史（全文仮訳）

公益財団法人都市緑化機構の機関誌『都市緑化技術』に第113号（2020年12月）より連載を開始した『イングランドにおけるガーデニングの歴史』について、その全体像に関心を持たれる読者の便宜を図るため、以下の要領で全文の翻訳を試みた。

1. この翻訳はあくまでも仮訳であること。特に、本書において、著者は様々な文献を引用しているが、その中には、原文が中世英語、ラテン語等で書かれたものが多数含まれている。これらの文献は基本的には著書の論述を裏付ける原典資料であり、これなくしても本書を理解する上で大きな妨げにはならないが、昔の様子をより生き生きと知るためには貴重な文献である。したがって、できるだけ正確な翻訳となるよう心掛けたところであるが、訳者の力不足等もあり、今後見直される可能性があることを予めお断りしておかなければならない。
2. 本文中、下線部分が『都市緑化技術』に要約として掲載した関連箇所である。ただし、要約であるため、本文と一部表現が異なっているところがある。また、植物名については、単純に和訳した場合、後ほど確認が簡単にならなくなるおそれがあることから、初出の箇所では和名と英名を併記することを基本とした。また、学名が特定できるもの、たとえば St. John's worts は、その和名セイヨウオトギリソウを採用し、加えてハーブ辞典などで和名化しているもの、たとえば mullein は、マーレイン [モウズイカ] と併記した。また、和名が見当たらないもの、和名が一般的でないもの、たとえば the wild scabious はセイヨウマツムシソウの一種というような表記とした。
3. 一般的によく知られている人名、地名などの固有名詞は片仮名表記としたが、辞書に出ていないものは原文表記のまま、辞書に出ているが知名度の低いものは片仮名と原文を併記した。
4. 著者による脚注で短いものは本文中に（*）というような形で表示し、長いものは区切りのよい所に別記した。なお、脚注で使用されている記号（*、†、‡など）は対応がわかるようにそのまま使用しており、原文ではページが変わるごとに、*から始まるが、訳文では必ずしもページの区切りまでは対応していないので、*が同じページで続いたり、同じページなら *Ibid.*（同書）で済むところが、原文のページが異なるために訳文では同じ脚注が繰り返される場合もある。また訳者による注釈は [] で表示した。

（参考辞書） ジーニアス英和大辞典（大修館書店）
グランドコンサイス英和辞典（三省堂）
A Glossary for the Works of Geoffrey Chaucer
Librarius middle-English glossary
Middle English Compendium, University of Michigan

イングランドにおけるガーデニングの歴史

The Hon. アリシア・アマースト著

“They set great store by their gardeins”

Sir Thomas More

彼らは自分たちの庭園をととても大事にした

トーマス・モア卿

第2版

ロンドン

BERNARD QUARITCH, 15 PICCADILLY, W.

1896年

序文

私がガーデニング [庭いじり] が好きで、またガーデン [庭園] に関する古い文献を勉強することが好きだということを知っていて、パーシー・ニューベリー氏 Percy Newberry は、1891年の春、私に彼の書いたいくつかの論稿について編集してはどうかと持ち掛けてきた。その論稿とは、エリザベス時代に至るイングランドにおけるガーデニングの歴史について書かれたものであり、1889年に Gardner's Chronicle に掲載されたものであった。そして私にそこから先の歴史を書いてはどうか、という話であった。私はそのテーマについて大いに興味をかきたてられ、新しい資料もたくさん集めた結果、当初の計画を大幅に拡張することを決心し、続きの歴史を書くだけでなく、その前の部分についても再度詳しく、原典から新しい情報を引き出しながら考察することとした。したがって、まず第一に、ニューベリー氏に対して、彼の論稿と注釈を自由に使うことを許してくれたご親切に対し感謝申し上げたい。

イングランドの庭園の歴史について書くとなれば、それはとてつもなく楽しい仕事となるであろうが、この本はそのことを目的としたつもりはないから、多くの有名な庭園について以下のページにおいて触れられていない。ただ、いくつかの実例についてはその経年的な様式を説明する便宜上参照されており、またその他の庭園が列挙されているのは様々な事例があることを示すためだけのものである。むしろ著者の希望としては、ここに扱うテーマの広範さから見れば不十分なものと承知の上、この本が庭園を分類して、それがいつの時代のものであるかを確定する手引きとして何らかのお役に立てればと願う次第である。多くの場合、ある庭園について正確な年月を特定することは常に困難なことと思われる。それは建物に隣接している庭園というものは、極めて早い時代から存在していたことが多いにもかかわらず、その変化というものが、たとえ少しであったにしろ、あまりにもゆっくりとしていたがため、現在の姿が一体いつ形作られたか明確に特定することがほとんど不可能であるからである。ここで多くの友人たちに感謝の言葉を述べなければなら

ない。彼らはとても親切に、庭園に関する情報を教えてくれたり、また図面や写真を提供してくれたり、あるいは公的、私的コレクションとして所有している写本 MSS[manuscripts、単数は MS. manuscript] を閲覧できるように手配してくれた。

同時に英国学士院会員 F.R.S の J.G. ベーカー氏が校正刷り段階の原稿全体を見てくれたご親切に対し感謝の気持ちを込めてここに記しておきたい。校正刷りの訂正は、私の友人であるマーガレット・マッカーサー嬢が親切に協力してくれたおかげで楽に進んだ。私の感謝の気持ちは次の方々にも捧げられることになる。スキート Skeat 教授とジェームズ・ブリテン氏は 15 世紀の写本に出てくるいくつかの植物が何であるか特定するお手伝いをしていただいた。R.E.G. カーク Kirk 氏はラテン語で書かれたものを解読する時に助けていただいた。マイケル・カーニー Kerney 氏は 17 世紀末までのガーデニングに関して印刷された本の参考文献一覧を改訂するにあたって助けていただいた。残念なことは、1699 年以降の続きについては私がこうしたいと思ったほどには時間と努力を注げなかったことである、その理由は、数か月の間、私が海外に行っていて留守にしたため、かなり急いでその部分を仕上げなければならなかったことによるものであった。

アリシア M.T. アマースト

ディドゥリントン・ホール ノーフォーク

DIDLINGTON HALL, NORFOLK.

1895 年 9 月

第 2 版序文

第 1 版はあっという間に売切れてしまったので、多くの点を書き足す間もなく第 2 版を求める声が出てきた。とは言え、いくつかの修正がなされ、その主なものは、初期の写本から引用したカンタベリー大修道院の配置図の一部を入れたこと、第 1 版では誤って使われてしまったブロムウィッチ Bromwich 城の図ではなく、正しいインジェスター Ingestre の図に差し替えたこと、そしてガナーズベリー Gunnersbury の図を付け加えたことである。

第 1 版で見落とされていたミスプリントをご親切にも指摘してくれたすべての友達に感謝の意を表したい。これらの点については修正に努めた。また参考文献に何冊かの本の名前を追加するにあたって助けてくれた関係者に対しても負うところが多い。

アリシア M.T. アマースト

1896 年 6 月